

人は自分の匂いを嗅げない

盛田 常夫

どれほど悪臭を放っていても、人間は自分の匂いを嗅げない。なぜだろうか。嗅覚に匂いのストレスを溜めない仕組みが働いているからだ。匂いに慣れることでストレスから解放される。しかし、自分は悪臭を感じなくても、第三者にとって悪臭であることに変わりはない。匂いに限らず、慣れは恐ろしい。

こういう仕組みは社会を観察する場合にも当てはまる。「灯台下（もと）暗し」。人は身近なことはついつい見逃してしまおうし、慣れてしまうと物事の本質が見えなくなる。だが、近くにいる人には分からなくても、遠くから見ると良く分かる。日本のことも、外国から見ているとよく分かる。

スポーツ選手の飲酒・喫煙

ロッテに入団する大嶺選手の飲酒が報道され、ロッテ球団は契約延期を決めた。同様な「事件」に、ダルヴィッシュ投手の入団前の喫煙があった。非難の理由は成人年齢に達していないというだけ。「アスリートは喫煙（飲酒）すべきでない」という真つ当な議論を展開するメディアは一つもない。「喫煙・飲酒は 20 歳になってからにしろ」というなら、ただの体育会的なルール。日本のスポーツ界では本末転倒の議論がまかり通っている。

ペナントレースで巨人の内海投手がめった打ちに合って降板した時に、原監督は「ヘヴィースモーカーで、アスリートとしての自覚がない」と批判したが、日本のスポーツ界でそういう批判を展開する監督はどれほどいるだろうか。アメリカでは「アスリートは喫煙しない」が常識。しかし、日本のスポーツ界は「喫煙」に甘い。体調管理とトレーニングメニューに気を遣い、選手生命の維持に努めている工藤投手ですら愛煙家である。

以前、友人が自然食に凝っていて、何度もしつこく自然食を勧めるから、「君の喫煙を止める方がよほど安上がりだし健康のためにはるかに良いのでは」と禁煙を進めてから、自然食の押売りがなくなった。スポーツ選手、とくに呼吸器を激しく使用するスポーツでは喫煙は厳禁である。歌手も同じ。肺の細胞がタールで塞がれ、肺活量が減退し呼吸機能は低下する。明らかに酸素摂取量は減退するから、運動能力が落ちる。そういう自覚のないアスリートや歌手はプロとして失格である。日本人ゴルファーに喫煙家は多いが、ゴルフスウィングだけの運動だから喫煙は個人の嗜好の範囲。社交ゲームにフィットネスへの配慮は無用ということか。しかし、喫煙を常習とする力士や野球選手はアスリートとしての自覚に欠けると言われても仕方がないだろう。若いアスリート教えるべきことは、20 歳ルールではなく、アスリートとしての自覚である。

事業仕訳

民主党が目玉にした「事業仕訳」は政治的パフォーマンスとして成功した。それを実質

的に仕切っていたのは、官僚出身の若手政治家である。自民党はただのパフォーマンスにすぎないというが、官僚出身の能力のある若い政治家が自民党では得られない活躍の場を、民主党で与えられたのだ。それが理解できずに、長老支配を続けている限り、自民党に有能な若い人材が集まらないだろう。だから、凋落する運命にある。

こういう事業仕訳をハンガリーでやったら、国家財政赤字などは即座にゼロになるだろう。無駄な補助金や顧問契約を装った公金横領の規模が大きいからだ。BKV（ブダペスト交通公社）の腐敗も底なしの様相を呈しているが、残念なことに、そういう問題に切り込もうとする若い有能な人材がハンガリーには不足している。正義感を持つようになるためには、ハンガリー社会全体にもう少し生活水準の上昇が必要なのだろうか。「衣食足りて、礼節を知る」。まだ衣食が足りていないのだろうか。今は自分の所得を増やしたり、財産を形成したりすることに一生懸命で、社会正義は二の次になっている。

ある程度の生活の余裕がないと、人は正義を唱えることもできない。悲しいかな、それが人間社会の真実である。とはいえ、もう少し国の将来を思って、社会正義のために活躍してくれる若人が輩出しないと、ハンガリーは発展途上国並の腐敗国家に堕してしまう。

アメリカが怒っている？

普天間基地移転合意の履行をめぐる日本のメディアの論調も奇妙である。「アメリカが怒っている。アメリカとの友好関係が崩壊する」と報道するが、日本の基地問題の本質が何であるかと議論したものが少ない。アメリカ軍が日本全土に軍事基地を保有し、アジアのみならず、中東まで視野に入れた軍事戦略基地として日本を位置づけている意味を理解していない、理解しようとしていないからだ。

日本全土にまたがるアメリカ軍基地の存続は、アメリカによる軍事面の戦後占領の継続に他ならない。日本人はそのことを忘れてしまっている。アメリカの従者として戦後60年もアメリカに仕えてきたから、対米軍事従属が日常になってしまった。だから、「アメリカを怒らせてはならない」という幼稚で腰の引けた議論がまかり通っている。まさにこれが現在の日本の対米外交のレベルである。

日本のアメリカ軍は日本を守るために駐留しているのではない。アメリカの軍事的な世界戦略にもとづいて、日本の各地に世界展開に必要な戦力が配置している。嘉手納基地も横田基地も、それぞれ明確な軍事的使命をもって展開されている。日本の首都圏の民間航空圏は横田基地の存在によって、著しく制限されている。こういう国は先進国の中で日本だけだ。アメリカの基地があることで、「日本は他国からの侵略にたいする抑止力を獲得しているから、日本はアメリカに全面的に協力する必要がある」というのが、アメリカの論理。しかし、この抑止力は「アメリカ軍駐留のおまけ」でしかない。歴代の自民党政府はこの「おまけ」を無条件かつ全面的に受け容れ、敗戦による米軍駐留をそのまま容認してきただけなのだ。

だが、戦後の歴史を振り返ってみて、アメリカ軍の存在がどこの国からの攻撃にたいす

る抑止力になってきたのだろうか。抑止力より、アメリカの戦争に否応なく後方支援しなければならなかった義務の方がはるかに大きかったのではないか。実際、アメリカのヴェトナム戦争やイラク戦争に日本のアメリカ軍基地は総動員された。しかし、それらの戦争が誤りだったと総括されているのに、日本の政治家はまったく知らん顔である。脳天気と言われても仕方がない。イギリス議会はブレア元首相のイラク参戦を検証しているが、日本の政治家はアメリカの威に隠れて後方支援という形で参戦してきたことに頼りである。

アメリカの軍事戦略の後追いをしているだけだから自らの定見がない。本当に正しかったのか、それとも誤りだったのかという程度の議論すらないという政治レベルだ。だから、日本外交が国際的に舐められる。日本の意見を聞かなくても、アメリカの意見を聞けば十分ということになる。経済一流、政治三流と言われる所以だ。骨のある保守であれば、自立した定見を保持し、民族的な利益を守ろうとするだろう。ところが、アメリカに従属し、牙を抜かれた保守政治家には、そのような気概はない。日本の保守や右翼はアメリカの軍事占領 60 年で骨抜きにされ、腰抜けになった。

現存の普天間移転合意は、「暴力団が街の中心にいるのは困るから、人員を減らして、人里離れた所へ移転してください」とお願いしているのと同じ。一つの基地を閉鎖して、新たに基地を作るのでは、アメリカ軍の基地は永遠になくならない。この程度の合意を得るために、「血のにじむような努力をしてきた」と自民党は言うが、アメリカは基地返還自体にはいとも簡単に応じた。代替基地があれば何も問題はないし、海兵隊も沖縄にいる必要性もないからだ。日本政府が苦勞したのは代替基地の選定である。きれいな海を埋め立てる案に決めるのに、「血のにじむような」苦勞をしたということだ。しかし、これが胸を張って最善策ですと言えるだろうか。この程度の合意なら、政権交代を期に、合意を白紙に戻して、「最初から基地の根本的縮小交渉をやりましょう」というのは当然ではないか。外務省の事務方は困るだろうが、政権が変わったのだからそれは腹をくくってやるしかない。それにたいして、「外交交渉のルールを知らない。アメリカが怒っている」と鳩山政権を批判するメディアや政治家は、逆にアメリカの軍事占領で洗脳されてしまっている。情けない限りだ。

ジョセフ・ナイが言っている。「普天間のような二次的な問題は日米関係に影響する問題ではない。それなのに、ことさらに鳩山内閣を恫喝すれば、アジアの最重要な軍事戦略基地を確保しているアメリカの権益が失われる。そういう馬鹿なことをしてはいけない」、と。これがアメリカの本音だ。アメリカの国務省や国防省へのこのこ出かけてご機嫌取りしている日本の政治家は、最初から舐められていることを知るべきだ。

鳩山首相が唱える「駐留なき安保」は日本がアメリカの軍事占領状態から自立するための最低限の条件。それが実現しない限り、日本はいつまでもアメリカの従者であり続ける。もっとも、民主党の政治家の理解もバラバラで、それぞれが自らの理解を反芻し自問するプロセスを公人として行ったので、政府や党としての政策のブレが批判された。政治的に未熟な対応が混乱をもたらしていることは否定できないが、それが民主党の現在の状況な

のだ。

天皇の「政治的利用」

政界からとっくに引退していいはずの安倍元首相が、周副主席の天皇会見を「政治利用」と批判する資格があるだろうか。彼が首相時代に試みたのは、憲法を改定して「天皇の元首化」を確立することではなかったのか。形だけの天皇制から実の伴った天皇制に変えようとしたのではなかったのか。そうやって、天皇制を全面的に政治利用することが、自民党の究極の目標ではなかったのか。自分のやってきたことを簡単に忘れてもらっては困る。

もともと天皇制そのものが政治的存在だから、あれは「非政治的利用」これは「政治的利用」などと仕訳ができるものではない。ところが、政治的存在であるはずの天皇制が政治的役割を果たしてはならないという建前になっているところに象徴天皇制の矛盾がある。皇室儀礼を遂行するだけのためなら、インテリのプリンセスは不要だった。儀礼の意味を問うことなく、たんたんと儀式を遂行できる皇族がよかった。雅子妃は象徴天皇制の犠牲者である。形だけのことが日常的に強要されれば、人として生きていく意味を失うのは当然だろう。

中途半端な形だけの天皇制ではなく、もっと政治的な意味を付与した天皇制に変えていく試みが、「元首化」の議論だった。しかし、それは戦前の天皇制の復活への道になる。その道を選ばず、象徴制を守りたいというなら、それとは逆の道を徹底することしかないではないか。憲法の規定から天皇制を外し、天皇家を政治制度から切り離すことでしか、根本的な解決策はない。現在の天皇制が何時まで存続するか分からないが、元首化とは正反対の道しか残されていないだろう。亀井大臣が言うように、天皇家は京都御所に移り、公家の伝統を守る家として存続していくのが良い。しかし、日本では天皇制にかんする憲法論議はタブーになっている。こういう議論ができない日本はまだ後進国。まともに議論されるまでに、まだ長い時間が必要だろう。